

全国の火山活動状況(1981年4-6月)*

気象庁地震課火山室

気象庁が常時観測を実施している精密観測4火山については、1981年4月以降6月末までの活動状況を、普通観測13火山とその他の火山については、報告を受けたものについて状況を要約した。

火山情報発表状況を第1表に、全国火山活動状況を第2表に示す。

第1表 火山情報発表状況(1981年4~6月)

火山名 情報	桜島	阿蘇山	浅間山	伊豆大島	十勝岳	樽前山	有珠山	北海道駒ヶ岳	吾妻山	安達太良山	磐梯山	那須岳	草津白根山	三宅島	雲仙岳	霧島山
定期	3	3	3	3	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
臨時	1	1														
火山活動																

第2表 全国火山活動状況(1981年)

火山名	4	5	6
桜島	▲	▲	▲
阿蘇山			△
有珠山	△	△	△
諏訪之瀬島	▲	▲	▲
福德岡の場	△		
爺爺岳			▲

▲ 噴火
△ 火山性異常

桜島

爆発回数、噴煙回数、地震回数の月別推移は第3表のとおり。活動は全般に低調であったが、5月17、20日夜には南岳火口上に火映が観測され、5月6日13時13分と16日6時14分にはA型地震が発生し、震源は南岳火口西側約1km、深さ約5kmと推定された。

主な活動

- 6月8日11時28分の爆発は、中量の噴石を5合目まで飛ばし、鹿児島市で大きな爆発音がきかれたほか、枕崎市でも爆発音、空振を感じた。

- 6月14日4時19分の爆発は、大きな爆発音と空振を伴い、降雨中で噴石は観測できなかったが、ゴロゴロという鳴動が气象台でも聞かれた。

第3表 桜島火山観測資料

月	1981/4	5	6
爆発回数	2	4	3
噴煙回数	0	5	7
地震回数	977	1234	775

阿蘇山

中岳第1火口は6月15日、小規模の土砂噴出を起こしたほかは、全面湯だまりが続き、噴湯現象も弱く、火口内壁からの噴気もほとんど変化はなかった。火口縁上では少量の白煙が時々観測される程度で、表面活動も弱く、地震活動も第4表のように、穏やかな状態が続いた。

第4表 阿蘇火山観測資料

月	1981/4	5	6
地震回数	40	22	27
孤立型微動回数 (0.5 μ 以上)	0	7	0
連続微動平均振幅 (μ)	0.0	0.0	0.0

土砂噴出について

中岳第1火口で6月15日12時30分ごろから13時にかけて、土砂噴出が観測された。阿蘇山測候所の現地観測及び阿蘇町役場監視員の話によると、3か所で噴出が始まり、30mくらいの高さに達し、これまで薄い緑色をしていた湯だまりは全面灰色となり、その後も弱い噴湯現象が続いた。15日12時39分、12時44分に最大振幅1 μ 、12時51分に3.7 μ の地震が発生した。しかし17日の観測では再び静穏化したので、15日規制された第1火口周辺への立入りは、17日解除された。

浅間山

月別、観測点別地震回数は第5表のとおりで、回数的にはさほどの増加はみられなかった。しかし5月5日には火山性地震が多発し、また5月末から6月初めにかけて、振幅の大きい地震の発生がみられた。5月29日0時16分に振幅のやや大きい地震が発生し、A点で最大振幅28 μ であった。これに引き続き、同じような地震が6月6日16時43分までに8回発生し、このうち最も大きかったのは6日2時58分のもので、測候所において6.9 μ (A点で振切れ)であった。

遠望観測によると、「やや多量」の噴煙が観測された日数は、4月：1日、5月：4日、6月：3日、

第5表 浅間火山観測資料

観測点 \ 月	1981/4	5	6
A	80	52	124
B	291	438	417
C	263	382	385

月別噴煙最高高度は、4月、5月：1200 m、6月：1500 m、噴煙の色は白色であった。

5月14日に浅間山の火口観測を実施したが、火口底の状況はこれまでの観測結果を特に目立った変化はなかった。噴煙の色は白色で、噴気温、刺激臭ともやや強く、また噴気量の消長が明らかな所が多く認められた。

伊豆大島

特に変りはなかったが、6月7日の午後から8日の朝にかけて、伊豆大島付近で小さな地震が多数発生した。それらのうち、最も大きかったのは、7日15時2分に起ったもので、大島で震度Ⅱ、館山でⅠであった。震源は波浮港の南方数km付近で、深さ約10 km、マグニチュード4.2と推定された。

十 勝 岳（旭川地方気象台 6月24日火山情報）

6月22、23日、十勝岳の現地観測を実施したが、62-II火口は相変わらず多量の噴煙を上げており強い刺激臭が感じられたが、その他の火口は特に変りはなく、全般に大きな変化は認められなかった。

また火山観測所からの遠望による噴煙の状況は全般に変化はなかった。

火山性地震回数は次のとおり。

月	9	10	11	12	1981/1	2	3	4	5	6*
回数	17(1)	7	14	7	29	23	11	8	7	14

注) ()内は有感回数

* 6月22日現在の回数

樽 前 山（苫小牧測候所、5月20日に山情報）

5月18、19日、樽前山の現地観測を実施したが、A火口では噴煙量は前回（10月）同様、時々強く噴出しており臭気も強かった。また火口北側にはごく少量の灰が堆積していた（2月下旬活動によるものと思われる）。

月別地震回数次のとおり（いずれも無感）

月	10	11	12	1981/1	2	3	4	5月18日まで
回数	25	209	152	420	1121	87	86	45

有珠山（室蘭地方気象台 5月12日に山情報）

有珠山の地震活動と地殻変動は弱まりながらも続いている。地震は4月17日に1日に113回の発生があるなど、ときどき活発化するが、次第におさまる傾向がみられる。また北大有珠山観測所の観測によれば、有珠新山とオガリ山の隆起と山麓の地殻変動は衰えながらもなお続いている。気象台からの遠望による有珠山と昭和新山の噴煙状況に異常は認められなかった。

地震発生状況次のとおり。

月	11	12	1981/1	2	3	4	5*	5月10日現在
地震回数	604	571	357	289	235	485	16	
有感相当回数	106	94	63	49	41	92	3	

5月7、8日実施した有珠山と昭和新山の現地観測結果次のとおり。

有珠山

銀沼火口とI火口は活発な活動をしている。銀沼火口の北壁の噴気孔及びI火口からは多量の噴気が出ている。I火口では高温の噴気孔が多数あり、660℃を観測した。またI火口とその周辺の噴気は青色を帯びており、多量の有毒ガスが含まれていると推定される。

外輪内壁と北屏風山の地熱地帯の噴気にはあまり変化はなく、周辺の状況にも変化はなかった。

外輪山は火口原内の隆起により北から北東側の部分が押出され、外輪山外側は急傾斜となって崩落しやすい状態となっている。

昭和新山, 四十三山

前回の観測に比べ変化はなかった。

北海道駒ヶ岳（森測候所 6月1日火山情報）

5月27日に北海道駒ヶ岳の現地観測を実施したが、各観測点の噴気量、地中温度及び火山性ガスの測定値は、前回（10月）と比べ大きな変化はなかった。

遠望観測によると噴煙は昨年10月以降観測されていない。

月別地震回数次のとおり（いずれも無感）。

月	9	10	11	12	1981/1	2	3	4	5
回数	14	0	2	1	6	1	3	1	0

吾妻山（福島地方気象台 6月19日火山情報）

6月上旬に吾妻山の現地観測を実施したが、前回（昨年10月）の観測結果と比べ各観測点とも特に変化は認められなかった。遠望観測によれば、噴煙量はきわめて少量で、見通しのよい日でも確認が困難であった。

火山性地震回数は少なく平常状態で経過した。

安達太良山（福島地方気象台 6月19日火山情報）

5月下旬から6月上旬にかけて安達太良山の現地観測を実施したが、前回（昨年10月）の観測結果と比べ各観測点とも特に変化は認められなかった。

火山性地震回数は少なく、平常の状態を経過した。

磐梯山（若松測候所 6月24日火山情報）

6月16, 17日、磐梯山の現地観測を実施したが、昨年10月と比べ各測定点とも特に変化は認められなかった。火山性地震回数も少なく、平常の状態を経過した。

那須岳（宇都宮地方気象台 6月2日火山情報）

5月26, 27日、那須岳の現地観測を実施したが、噴気、湧水、温泉の温度、pH等に変化は認められなかった。遠望観測による期間中の噴気量は少量か中量、色は白色又は灰白色で、特別な変化は認められなかった。

12月30日15時30分、1月1日17時52分、1月3日1時16分の3回、那須岳周辺で火山性の有感地震を感じたほかは、平常な状態が続いている。

草津白根山（前橋地方気象台 6月3日火山情報）

5月8日、21日、草津白根山の現地観測を実施したが、前回（10月）と比べ、各観測点とも特に変化は認められなかった。

月別地震回数次のとおり。

月	12	1981/1	2	3	4	5
回数	21	7	4	8	8	6

御岳山（気象庁 報告）

1980年6月、気象庁で御岳山9合目に設置した地震計（送信装置を含む）の撤収が6月10～11日実施された。その際、気象庁職員による火口観測が実施されたが、その状況次のとおり。

- (1) 第1火口 白煙を認めるも火口現認しなかった。
- (2) " 3 " 噴気音極めて強く火口より20mくらいで会話時々判明せず。直径大きく漏斗状
- (3) " 6 " 埋没
- (4) " 7 " 黒灰色の湯だまり、土砂噴出1～2m、湯だまりの温度88℃
- (5) " 8 " 痕跡
- (6) " 9 " 北壁の噴気は変化なし、土砂噴、湯だまりともになし、火口内の細い流水温8℃、雪解け水の温度とみられる。
- (7) " 10 " 4つの火孔のうち、西側のものが単独化して浅い皿状を呈するが、土砂噴なく噴気温123℃、泥土はやや軟弱。東側の3つの火孔からは白煙噴出、湯だまり、土砂噴ともになく、噴気温138℃

これらの観測結果からみて、土砂噴、湯だまりの減少が特に顕著で、このことは初期の噴火に関係した水の補給がやや減少した結果とも考えられる。

その後、6月23,24日、王滝村職員の観測によると、先日まで強い噴気をしていた第3火口は、噴気孔から弱い噴気がみられる程度、第7火口も噴気弱く、土砂噴出はなかった。

三宅島（三宅島測候所 6月5日火山情報）

6月3,4日、雄山の現地観測を実施したが、噴気地帯の噴気量は前回と比較してほとんど変化なく、噴気温度はやや高目、噴気地帯の地中温度は多少の高低はあるが、異常はなかった。噴気地帯の炭酸ガスは1.6%で他のガスは認められなかった。

火山性地震は3月33回、4月6回、5月2回で、三宅島近海の地震も含まれている。

雲仙岳（雲仙岳測候所 4月10日火山情報）

4月3日に雲仙岳の現地観測を実施したが、特に異常は認められなかった。

月別地震回数は次のとおり。

月	12	1	2	3	計
地震回数	57	59	76(1)	33	225(1)

注) ()内は有感回数

霧島山（鹿児島地方気象台 5月8日 火山情報）

新燃岳火口及び御鉢火口には特に異常現象は確認されなかったが、硫黄谷温泉の公共駐車場一帯の噴気活動は増大した。えびの高原硫黄山の噴気や新湯地熱その他の温泉等に変化はなかった。

新燃岳南西斜面1.8 kmに設置した倍率5000倍の地震計による地震回数次のとおり。

月	1	2	3	4
回数	330	22	16	15

1月13日から14日にかけては、新燃岳付近が震源とみられる（東大霧島火山観測所による）微小な火山性地震が多発した。

硫黄谷温泉の噴気活動状況は前号掲載と変化ないため省略した。

諏訪之瀬島（諏訪之瀬島分校 報告）

1981年4月 噴火（15, 16, 26日）

5月 噴火（14日）

6月 噴火（12, 13, 15, 16, 29, 30日）

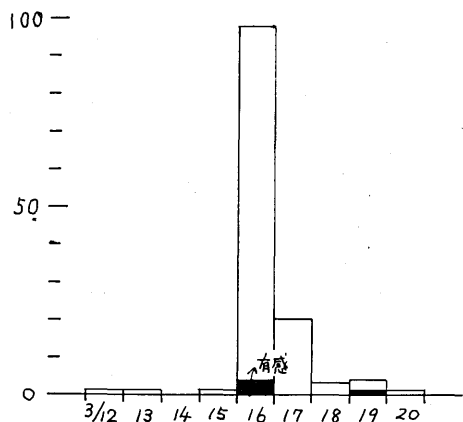
トカラ列島悪石島付近の群発地震

トカラ列島悪石島で1981年3月16日4時54分以降約1時間半、4～5秒おきに震度Ⅱ～Ⅲの地震

が頻発した。十島村中之島支所は悪石島の崖下に居住する7世帯に対し、地震がおさまるまで避難するよう勧告した。

この地震は第1図に示すように12日から起っているが、16日が最も多く以降減少した。時間別にみると、16日4～7時に集中発生している。名瀬測候所（悪石島の南約120 km）の地震計（59型、100倍、5秒）によるP～S分布は第2図のとおりで、12秒台をピークとする分布を示している。気象庁ネットで求めた震源分布は、第6表並びに第3図のとおりで、震源は悪石島南方海域となっているが、ネットの関係で3個だけ決定できた。マグニチュードは3個とも5.3であった。

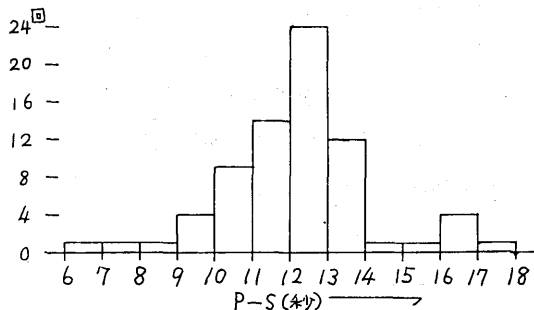
この地域では1975年9月25日にも有感群発地震が発生しているが、そのときは小宝島で最も強く感じた。そのときの状況は本会報第6号に報告した。



第1図 1981年トカラ列島群発地震日別頻度

（名瀬測候所59型、100倍、5秒地震計による）

黒ぬりつぶしは名瀬における有感回数

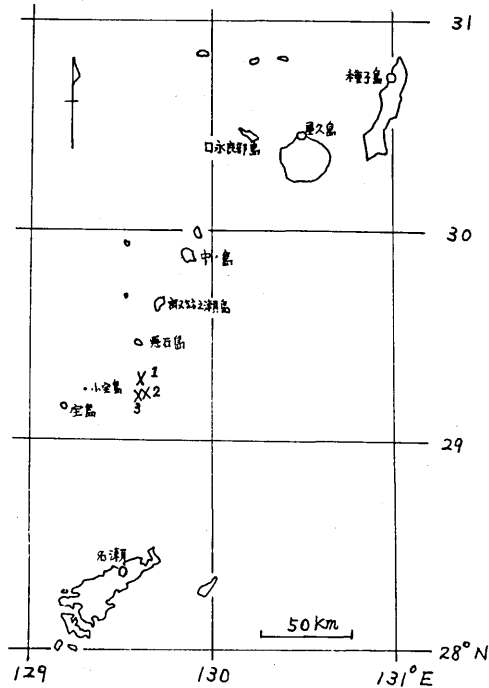


第2図 1981年トカラ列島群発地震P～S分布

（名瀬測候所59型による）

第6表 1981年トカラ列島群発地震震源表

番号	発震時				震源			マグニチュード
	月	日	時	分	北緯	東経	深さ	
1	3	16	6	33	29°17'0.8"	129°35'2.7"	10 km	5.3
2	3	16	21	28	29°14'0.9"	129°36'2.6"	0 km	5.3
3	3	19	3	20	29°13'0.5"	129°35'1.5"	20 km	5.3



第3図 1981年トカラ列島群発地震震央分布
×印……震央（数字は第6表に対応）

海底火山（海上保安庁水路部 報告）

福徳岡の場

変色水視認（4月20日）

爺 爺 岳（札幌管区气象台 報告）

一般住民から警察を経て根室測候所に入った情報によると、6月24日夜、爺爺岳の方向に光るものが見えるということであった。24日21時20分の遠望観測によると、だいたい色と青白い光が数分に1回くらの割合で見え、この状態は2時まで続いた。25日3時20分、黒い噴煙が爺爺岳の7～8合目から出ているのを観測したが、多少明確でないところもあった。根室海上保安部巡視船「石狩」が7月20日、色丹島で現地係官に聞いた話によると、爺爺岳は1か月ほど前、噴火し降灰があったということであった。

爺爺岳は1975年6月、1978年7月、活動の記録がある。

小笠原諸島に漂着したスコリア（父島気象観測所・海上保安庁水路部 報告）

7月9日から父島気象観測所前の浜辺に黒いスコリアが漂着し、10日は浜辺がいっぱいになるくらいであった。

これに先立ち、6月27～28日、東海区水産研の蒼贋丸は北緯24度付近海上で、黒いスコリアが大

量に流れているのを確認した。

7月13日、海上保安庁の巡視船「浦賀」の搭載ヘリの調査によるスコリアの分布は次のとおり。

父島の入江に帯状又は吹きだまり状になり、幅2～10 m、特に南側が多い。

兄島、弟島は東岸部の入江に幅5～10 m。

弟島南西方約1 kmの海上に幅2～5 m、長さ150 m。

スコリアの大きさは最大5×3×3 cm、平均1～1.5 cm、一部に二枚貝が付着している。

その他の小笠原諸島及び付近海上には顕著な浮遊及び漂着物を認めない。

これに関連し、マリアナ諸島北部のバガン島で5月15日、大噴火があった。